

『燃えよ剣』（上・下）

司馬遼太郎著 新潮文庫 上700円・下660円（税込）

動乱の幕末、時代の流れに迎合しない“武士”の生き様

言わずと知れた新選組について書かれた歴史小説である。昨年度のNHK大河ドラマは新選組局長の近藤勇を主人公としたものであったが、この小説は副長の土方歳三を主人公としている。

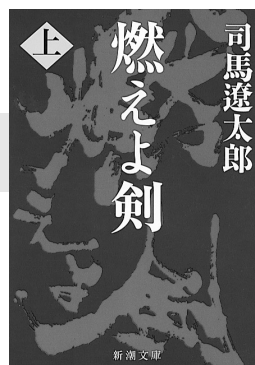
幕末の動乱期に、百姓の子として生まれた土方は、同郷の近藤、沖田らとともに小さな剣術道場で稽古とケンカに明け暮れていた。そんなある日、上洛する將軍の警固役として浪士組の募集があることを知った土方らは、歴とした武士になれるチャンス逃すまいと浪士組に加わる。そして、京都に上洛し、同郷の近藤、沖田らとともに新選組を作り上げ幕末当時の最強軍団に仕上げる。池田屋の変を経て、新選組はその名を世間に轟かせた。まさに土方の全盛期である。ここまでの彼の人生は単なるサクセスストーリーに過ぎず、これだけであれば土方歳三にそれほどの魅力を感じることはないだろう。土方が今でも多くの人々を魅了して止まないのは、その後の彼の生き様にあるのではないだろうか。

鳥羽伏見の戦いで、近代兵器を用いた薩長連合に完膚なきまでに敗北した白刃の部隊の新選組は時代の変化を思い知りながら江戸に帰った。そして、徳川幕府自体の崩壊とともに

に新選組も事実上崩壊する。多くの名だたる幕臣が明治新政府に迎合する中、剣だけに生きてきた土方は、一部の旧幕臣らとともに北へ北へと逃れ函館の五稜郭に辿り着く。そして、旧幕臣らとともに函館政府を樹立し、土方は陸軍奉行並に任命される。しかし、土方にとっては、そんなことなどどうでもよかったのである。剣だけに生きてきた彼は、武士としての死場所を求めるかのように明治政府軍と激しい戦闘を続け明治政府軍を悩ませ続けた。そして、とうとう最期と悟った時、土方は、白昼堂々と日本刀だけを携えて、銃口を向ける明治政府軍に単騎で切り込んで討ち死にを遂げた。「新選組副長土方歳三！」と名乗りながら…。もはや新選組など存在しないことはもちろんである。時代の流れには迎合せず、最期まで自分が憧れつづけた武士として死んでいったのである。

弁護士を取り巻く環境だけでなく、時代そのものの変化がめまぐるしい現在、時代の流れに乗れるわけでもなく、ただなんとなく流されていくだけであろう自分は、土方歳三のような人生に潔さを感じる。そんな小説である。

(会員 相良 圭彦)



『ベン・ハー』

1959年／アメリカ／ウィリアム・ワイラー監督作品

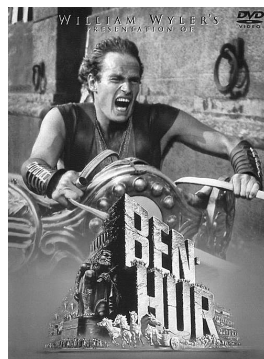
名画が持つ“合理性とは無縁の圧倒的な力”

あらかじめお断り申し上げるが、私は、この映画を映画として見たときに心に残り、あくまでも映画としての感想をここに述べる。

この映画を初めて見たのは、確か小学生の時分である。以来、小説も映画も、「歴史もの」を好んで選ぶようになった。その中でも、織田信長やらナポレオンやらが主人公のものではなく、その時代に生きた人物に脚光を当てたものを好む。「坂の上の雲」しかり、「アラビアのロレンス」しかりである。

異なる民族でありながら幼なじみのメッサラ（スティーブン・ボイド）とベン・ハー（チャールトン・ヘストン）は、ローマ帝国の司令官とユダヤの元王族として、征服者と被征服者の立場で再会するが、メッサラは、意のままにならないベン・ハーを、無辜の罪でガレー船へと送る。様々な運命の末に、2人は戦車競技場で相見える…。

今回の寄稿にあたり、私はDVD版を購入したが、クライ



『ベン・ハー』DVD
発売元：
ワーナー・ホーム・ビデオ
価格：¥3,129（税込）
品番：DL65506

マックスの有名な戦車競技のシーンは何度見ても圧巻である。無論、CGなど存在しない時代（1959年）、6年半の期間と約54億円の費用をかけて制作されたという本作は、まさに「古き良きアメリカ映画」といえよう。

もちろん、ストーリー面でも、アカデミー賞11部門を総ナメにただけの、「古き良きアメリカ映画」らしさではある。批判も多かろう。ただ、名画のためにひとつ弁解しておきたい。私は、映画や小説、テレビドラマなどを斜に構えて見るタイプではあるが、本作については、エンディングは別論、そこに至るまでの数々の「奇跡」は、見ていて不自然さを感じさせられたことがない。「十戒」のかの有名なシーンが、CGになった途端に何やら嘘っぽくなってしまいうように、名画には名画と呼ばれるだけの、技術力やストーリーの合理性とは無縁の圧倒的な力がある、とでも説明するのであろうか。

（会員 佐藤 亮）